

「北の山嶺」

……はるかなる文学の山脈

弘前市立郷土文学館の展示室の壁面に「北の山嶺」(小野正文・編、泉尚志・画)と題する大きな絵図が掛かっている。青森県出身・ゆかりの文人とそれに関わる中央の文人を山に見立てその系列を表現したもので、縹緲たる文学の山脈である。

郷土文学館が常設しているのはそのうちの 10 人。陸羯南、佐藤紅緑、葛西善蔵、福士幸次郎、一戸謙三、石坂洋次郎、高木恭造、平田小六、太宰治、今官一。弘前市ゆかりの「津軽文士」の系譜である。最初に置かれた陸羯南は、明治 22 年 2 月 11 日、大日本帝国憲法が公布され日本が近代国家への歩みを大きく進めたその日に新聞『日本』を創刊。〈独立不羈〉のジャーナリストとして日本の言論界に大きな足跡を残した。

弘前市郊外・鷲ノ巢山に堂々と建つ記念碑に刻まれた羯南の漢詩「名山出名士 此語久相伝 試問巖城下 誰人天下賢」は、名山・岩木山を望むこの地域の"Boys, be ambitious."として若者の心を鼓舞しつづけている。

令和 2 年、当館は開館 30 周年を迎えた。当初は文学館建設の構想はなく、図書館の片隅に郷土文学コーナーを設置の予定だった。しかし、文学関係者らによる熱い市民運動が実り、平成 2 年 7 月 1 日、文学都市・弘前ゆかりの「津軽文士」らの人と文学を顕彰する拠点として郷土文学館は開館した。30 年をかけて先人の方々が築いてこられた基盤の上に立ち、「北の山嶺」のはるかなる山脈に新たな光を当て、それに続く山脈を絵図に描き込んでいく仕事にしっかりと取り組む所存である。「誰人天下賢」…陸羯南の問いかけが聞えてくるようである。

櫛引洋一 (企画研究専門官)

新収蔵資料のご紹介

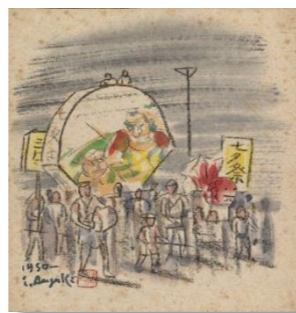
—多くの個人、団体から
ご寄贈いただきました—

- ◇写真…長部日出雄 結婚式・出版記念会や学生時代の弘前駅での写真
- ◇色紙…長部日出雄「津軽に生きる」、高松玉麗「初夢の餘情のまゝに夜具たゝむ」、小館善四郎「榎栳図 壬子初春」、鈴木栄二郎「ねぶた図」
- ◇書簡…福士幸次郎はがき (竹内俊郎宛ペン書 15 行)、石坂洋次郎はがき (今井則三宛年賀状、今井慶次郎宛礼状)
- ◇図書…三浦哲郎『白夜を旅する人々』(函入・署名入)、室生犀星『詩集・鶴』(函入・署名入)、中村草田男『句集 銀河依然』、(函入・署名入)

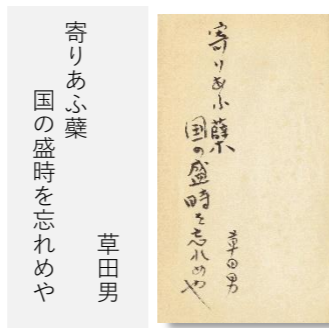
ほか



小館善四郎 色紙



鈴木栄二郎 色紙



寄りあふ薬
国の盛時を忘れぬや
草田男



中村草田男『句集 銀河依然』
みずす書房 昭和 28 年 2 月 10 日

◆新たに「文学忌」を開催

かつて市民の間で行われていた「まるめる忌」(高木恭造)、「幻花忌」(今官一)などの文学忌が衰退の一途をたどっています。そこで、当館ロビーにおいて、常設作家を中心に「文学忌」を開催します。各作家の忌日を含め 1 週間の特別展示を予定しております。お誘いあわせの上、ぜひご来館ください。

◆各作家の忌日

5/18(平田小六)、6/3(佐藤紅緑)、6/13(太宰治)、7/23(葛西善蔵)、9/2(陸羯南)、10/1(一戸謙三)、10/7(石坂洋次郎)、10/11(福士幸次郎)、10/18(長部日出雄)、10/23(高木恭造)、3/1(今官一)



北の文脈ニュース 第 82 号

Kitano bunmyaku news

第 44 回企画展 岩木山と文学

—弘前市立郷土文学館開館 30 周年記念—

開催中

令和 2 年 12 月 28 日 (月) まで

「津軽富士とや人の申す岩木山は例の金字形をなして弘前市の西の方に高く聳え、土用最中の今尚斑に雪を載せたり、(「易心後語」)」

明治 25 年の夏、名作「五重塔」で知られる幸田露伴が弘前で見た岩木山の姿です。田山花袋、谷崎潤一郎、森鷗外……、明治以降、多くの文人が津軽の地を訪れその感慨を書き綴る中、彼らの心に強く印象づけられたのが名山・岩木山でした。

弘前市立郷土文学館は、平成 2 (1990) 年 7 月 1 日に開館し、今年で開館 30 周年を迎えます。節目の年にあたる今回の企画展のテーマは、「岩木山と文学」。津軽を代表する名山・岩木山を文人たちがどのように描いたのかを、貴重な資料と詩情豊かな写真で紹介します。

〈第三の新人〉と呼ばれ、戦後の文壇に新風を吹き込んだ安岡章太郎は、昭和 4 年と 5 年の一時期に弘前市立第二尋常小学校に在学しています。安岡は、昭和初期に見た岩木山とその麓に集まる街並み、岩木川の流れと津軽平野の美しさを「音色の澄んだ四重奏曲をきかされているような景色だ」と書き表し、岩木山周辺の風景の美しさを称賛しています。

正岡子規門下の俳人であり後に少年小説で名を馳せた佐藤紅緑は、彼を師と仰ぐ福士幸次郎に宛てた書簡(昭和 19 年 12 月 1 日消印・青森県近代文学館蔵)の中で、山嶽と民俗の関係は「従来の単なる沿革史でなく山と人間と信仰の鎖鑰の考査」の段階に踏み込んでほしいと前置きしたうえで、岩木山に対する熱い思いをしたためています。

たとえば、兄たちには学費が潤沢に与えられたのに対し、紅緑が学生の頃には父が「貧乏のどん底」であったことを例に挙げながら、「此の困憊の時に際して老生の悲しき胸にいつも慰安を与ふるものは岩木山のみ」と岩木山を心の支えにしていたことを書き、そのうえで「岩木山の靈に感謝せる言葉は『ありがたうございました、佐藤は御蔭で生きて居ります』と岩木山への深い感謝を表しています。



企画展開催当日 企画研究専門官による解説の様子

このほか、本展では、田山花袋書簡(田山花袋記念文学館蔵)、森鷗外書簡(青森県近代文学館蔵)、岩田邦彦氏絵画をはじめ、書籍や書簡など約 80 点を展示しています。企画展記念図録では、藤田晴央氏(詩人)に序詩「岩木山」を、根深誠氏(登山家・記録作家)に特別寄稿「岩木山」を書き下ろしていただきました。また、展示・図録掲載の岩木山写真は菊池敏氏(写真家)によるものです。

〈文学の言葉〉で描かれた岩木山をとおして、津軽の文化と風土について理解を深めていただければと思います。

田山花袋と弘前

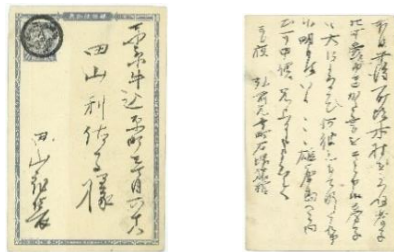


田山花袋(明治4年~昭和5年)は現在の群馬県館林市生まれ。自然主義文学を代表する作家で、『蒲団』『田舎教師』などの作品がある。弟・富弥が弘前にある第八師団に所属していた縁で、明治から大正にかけて何度か弘前市を訪れたことがある。

- ① ボツケツトから手帳を出して、その右の窓に横はつて見えてゐる岩木山を写生した。端麗な美しい山だ。成ほど津軽富士と呼ばれるのも尤だ。(『山水小記』大正6年12月10日 富田文陽堂)
- ② 汽車は全く南に向つて馳つてゐる。此処に来て先づ旅客の眼を驚かすのは、正面に当つて見えてゐる岩木山の端麗な姿である。(『日本一周 後編』大正8年8月20日 博文館)
- ③ こゝから浦内へ行く間で、旅客は岩木山の端麗な美しい姿を眼にすることが出来た。(『増補改訂 温泉めぐり』大正15年4月8日 博文館)

このように何度も岩木山のことを記し、かつ〈端麗〉という表現を繰り返し使っている。岩木山の美しい姿は花袋の心に強く残ったのである。『温泉めぐり』には、旅の風景のスケッチが何点か掲載されているが、残念ながら岩木山のスケッチは掲載されていない。一度、花袋が描いた岩木山を見てみたい。

花袋は『生』(明治41年10月25日 易風社)に「下宿は城址附人の素人屋、貴下の起臥する室は二階の由なれば、前に近くの見ゆることゝ存候。」と、ここでも在府町の木村家(弟・富弥が下宿した家)の二階の部屋から見える岩木山と思われる山を描いている。余程、岩木山が心に残っていたのだろう。



田山花袋はがき
田山花袋記念文学館蔵

さて、花袋は明治36年に弘前を訪れた際、妻宛にはがきを出している。元寺町にある石場旅館で書いたもので、明治36年8月4日の消印である。木村家を訪ねた様子が書かれており、富弥は不在だったが富弥の妻や姪と会い、翌日は男鹿へ向かう予定を伝えている。

はがきは群馬県にある「田山花袋記念文学館」所蔵のもので、《初公開資料》となっている。(現物の展示は夏頃まで、その後は複製を展示。)

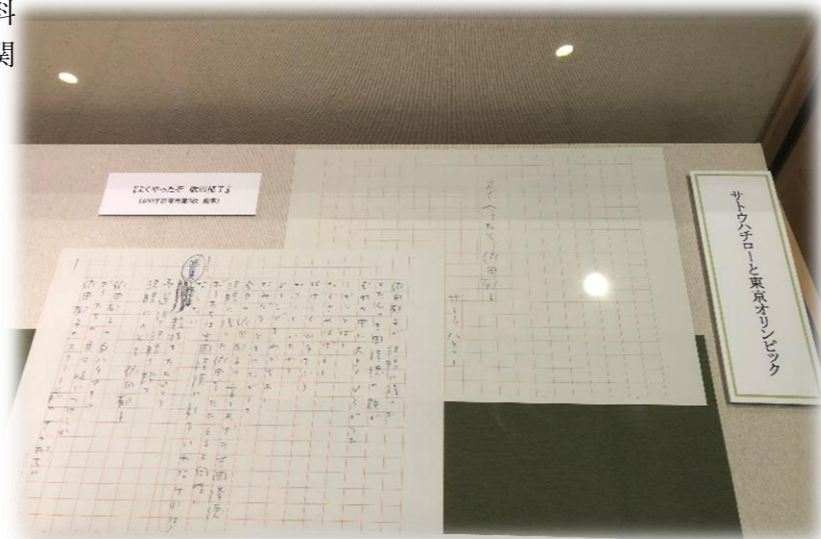
余談だが、花袋は妻「りさ」を「利佐子」「利佐」と書いたり、富弥の妻「フサ」を「房」「英」と書いている。

◆ スポット企画展 「新収蔵資料展」 - 令和2年1月12日~3月31日 -

現在公開中の本展は、当館が新たに収蔵した資料の中から魅力あるものを選び、特別展示の太宰治関係資料を含む五つのテーマで紹介している。

- (1) 鈴木栄二郎と石坂洋次郎
- (2) 新収蔵の色紙
- (3) 三浦哲郎の献呈本
- (4) サトウハチローと東京オリンピック
- (5) 特別展示：太宰治関係資料

今年度は4年に一度のオリンピック・パラリンピック大会が東京で開催されることもあり、「サトウハチローと東京オリンピック」の草稿は興味深いものとなっている。



展示の様子

出た とんだ 走った 五着だ よくやったぞ 依田郁子(草稿抜粋)

依田郁子(昭和13年~昭和58年・長野県)は日本の陸上競技選手で、元女子80mハードル日本記録保持者、1964年第18回東京オリンピックの同種目で5位入賞。また、依田の指導者・吉岡隆徳(明治42年~昭和59年・島根県)は日本の陸上短距離選手。〈暁の超特急〉と称せられ世界の強豪と渡り合い、第10回ロサンゼルスオリンピック100mの決勝に進出した。これは、歴代の日本人選手で唯一の快挙である。この2名の選手のように、今大会での日本選手はもちろん、全世界の選手たちの活躍が作家たちの筆を動かすことだろう。



文学散歩 「太宰治ゆかりの地を訪ねて」

講師: 斎藤 三千政(郷土文学研究家)



令和元年10月5日(土)に開催された恒例の文学散歩。今回は太宰治が弘前で過ごした3年間にスポットを当て、御幸町にある「太宰治まなびの家」集合、「弘前大学」解散のコースでした。



太宰治まなびの家(約90年前、同じ場所に太宰が...)



令和元年に新設された太宰のレリーフ(弘前大学構内) 太宰と握手することができる。

今回の文学散歩では、太宰が官立弘前高校時代に住んでいた御幸町界隈を散策しました。弘前に住んでいたころは義太夫に夢中になり、同人誌の出版や左翼活動に...と様々なことをしていた頃でした。

作家の安岡章太郎と太宰は、同時期に御幸町に住んでいて、もしかしたら道端ですれ違っていたかも...とロマンを感じる話もありました。

また、石坂洋次郎が疎開中に松森町(現・スーパーさとちょう)に住んでいたことや、葛西善蔵の生家、加藤謙一の生家など、弘前ゆかりの人の話を織り交ぜながら奥深く広がりのある内容でした。

90年前の町並みを想像しながら楽しいひとときを過ごしました。

次回の文学散歩は5月初旬で大鰐方面を予定しております。どうぞお楽しみに!!

2019年度 北の文脈文学講座・ラウンジのひととき



北の文脈文学講座

- 9/21 青森県郷土作家研究会の60年 講師：館田勝弘
- 10/19 110年目の太宰治 出演：「語る会」ほか
- 11/16 古川智映子の文学作品について 講師：斎藤三千政
- 12/21 新収蔵資料展 講師：櫛引洋一



ラウンジのひととき

- 9/7 余白のポエムにこころゆだねて 出演：船越素子、竹内晃
- 10/5 マンドリン&ギターコンサート 出演：古川里美、今井正治
- 11/2 太宰治が描く危険な女たち ~ドラマリーディング公演 出演：津軽カタリスト
- 12/7 余白のポエムにこころゆだねて 出演：船越素子、竹内晃

文学講座、ラウンジのひとときは2020年度も引き続き開催いたします。皆様のご来館をお待ちしております。

特別朗読会「110年目の太宰治」

令和元年12月14日、太宰治生誕110年を記念し、当館2階ラウンジで特別朗読会を開催しました。

出演は原きよさん、「語る会」の下川原久恭さん、今ゆき子さん。

原きよさんは朗読家・フリーアナウンサーとして活躍され、太宰治作品の朗読を得意としています。太宰治ゆかりの地での朗読ライブのほか、ゆかりの人物の取材も行っています。

「語る会」による「養鶏」、原さんによる季節にぴったりの「メリイクリスマス」、最後の「津軽」では三人の息の合った朗読で会場を魅了しました。

